



オリカルクムの記憶

五 小島の祠

峯村
明

オリカルクムの記憶 5

登場人物

小島の祠

038.

039.

040.

041.

042.

043.

044.

045.

046.

あとがき

奥付

登場人物

竜門渕 めるの	湖畔の旧家、竜門渕家の後継者 15歳
竜門渕 遠野	竜門渕家の現在の当主 めるのの曾祖母
河合 保ノ助	湖畔の温泉宿『かわいや』のせがれ 14歳
かわいや	温泉宿『かわいや』の亭主
A. V. ラウレンス	ベルギー人の鉱物学者
おシゲ / 源三	竜門渕家の使用人
星名 千助	アマチュアの鉱物学者

小島の祠

038.

回診の時間も昼食の時間も千介はとりとめもなく喋り続けた。小学校の教師時代のこと、貧しい子どもたちを教えようと私塾を作ろうとしたこと、鉱物学者になることをあきらめ一介の採取家として生きたこと、などを。

ひととおり喋り終えると、彼は横になり、満足した顔で目を閉じた。その寝顔を眺め、ラウレンス氏は低く保ノ助に語った。

「私も、貧しい土地の学校で子どもたちに教え、学校に来ることができない境遇にいる子どもたちにも教えたくて、私塾を作ろうと考えたことがあります。しかし次々と障害や問題が起こって実現しませんでした。そして、鉱物学者として彼に会いに来た。だから彼のたどった苦労や傾けた情熱が、ほんのちょっぴりですが、理解できると思います。……私は――」

なんと言おうとしたのか、彼は「私は――」と言ったきり黙って、物思いに沈んでしまった。窓に引かれたカーテンには白樺の濃い影が映り、葉の一枚一枚が初夏の風にひらひらと翻っていた。

水つ早町への道すがら、保ノ助はずっと胸に溜めていたことを話さなければ、と思った。さんざん逡巡して、峠のてっぺんでの小休止、ようやく口を開く決心がついて、「先生」、と、風に吹かれている背中に向かって呼んだ。氏はふだんとかわらない表情で「……ん？」と、振り返った。「どうしました？」

呼び止めておいて、なお迷い、振り向いて体を半分巡らしている氏を見上げた。いつも穏やかで、優しくて、毅然としているこの人が好きだ、と保ノ助は思う。こんな突拍子もないことを言い出す自分を笑って受け入れてくれるだろうか？ それとも、一笑され、先を急ぎましょう、と向こうを向いてしまうだろうか。けど、言わなくちゃ。あんな経験をした者がほかにいようとは、思われぬから。

「先生。あのな—— 先生が初めてうちへ来た時のこと、覚えてるか？」

ラウレンス氏は、ああ、とほほ笑んだ。「覚えてますよ。あなたがくれた握り飯は、とてもおいしかった！」

「うん、あの握り飯、おれの昼飯だった。それを先生にやっちまって、おれはすきっ腹かかえて舟をだして、竜門渚の船着場へ行った。そしたらそこで待ってたのは、ばあさまじゃなくて、めるのおじょうさまで。おれが腹すかせてるって知られちまって、めるのさまは小島の祠の前でおれにお供えを分けてくれた。おれはバチが当たるんじゃないかねえか、って、ちょっとおっかなかったが、めるのさまは『竜神さまは生き物の味方ですから』、って」

039.

「ふうむ……その帰りに、嵐に遭ったんですね……」

「そうだった。めるのさまを船着場へ送り届けて、帰る途中だった。舟が突風にあおられて……おれは湖に落ちた。バチが当たったと思った。

竜神さまが生き物の味方ってたって、そんなふう信じてられるのは、めるのさまが食べ物苦勞をされてねえからだろうし、自分とこに来たお供え横取りされてだまってるほど、竜神さま、人がいいとは思えなかったし、世の中、甘くみるなっておやじはよく言ってるし。

お供え食っちゃまったことから始まって、前の日にシジミ売った代金をこっそりくすねたことや、学校の試験の悪かったのをおふくろに隠してたことや、あんなことこんなこと、いろんなことが頭ん中、かけめぐった。竜神さまやめるのさまより、おやじの言うことの方がもっともだったなあ……と」

「……………」

「そのうち、水を飲んじまって、おれは観念したよ。おそろしくて、切なくてさ、泣きながら、すいませんでした、すいませんでした、おれがわるうございました、っていっしょうけんめい、謝った。バチが当たって死ぬんだから、行き先は地獄だな、なんて思いながら……気を失った。

ところが、ふと目が覚めた。ここが地獄ってどこか？

横殴りの雨が降ってて、雷が向こうの方にどかんどかん落ちてる。さすがに地獄はおっかねえ、それでも何か雨よけになるようなもんはねえかな、って見回したら、祠があったんだ。地獄の祠にはやっぱり鬼か何かが祀ってあるのかなあって思いながら、その前で縮こまって、うとうととした。そしたら——『眠るな』、そう聞こえた。『眠ったら死んでしまうぞ』、って——。

いや、死んでしまうもなにもさ、おれはもう死んでるんだから寝たっていいじゃねえか、眠いんだ、寝かせてくれよ、って文句言ったら、『父が捜している。目を覚まして、ここだ、と応えてやれ』

こうだったらいいな、って頭のどこかでこっそり考えたことを誰かが外からおれに言い聞かせてる、っていうか。親父がおれみたいなあほ息子、地獄まで探しに来てくれる、来て欲しい、なんて、いくらなんでも虫がよすぎるよなあ、おれ、なに考えてんだろ、往生際がわるいってのもんだぜ、保、たいがいにしろ、なんてひとりごと言ってるうち、雷が遠くなって、雨風が弱くなってきた。上をみあげると雲が切れたところからお月さまがちらっと――。少し明るくなってきてたから祠をもう一度よく見てみたら、これ、昼間みたやつじゃねえか！？　ここは地獄じゃなくて、祠のある小島だったのか！？

な、なあんだ、おれは小島に打ち上げられてたんだ、死んじゃあいなかったんだ、そういやあ、舟があおられた時、小島はずっと風下にあった。だから上手い具合に小島まで流されたんだ。風と波と小島のおかげでおれは助かったんだ！

おれは祠に手を合わせて拝んだ。竜神さまが助けてくれたんだと思った。ありがとうございます、って何度もお礼を言った。そしたら『ほら、迎えがきたよ』

あの時、すげえ深い霧が巻いていた。霧は物音も吸い込んでしまうし、湖に舟がいるなんて、まるっきりわからなかった。だから『ほら、迎えがきた』なんて、おれにわかるわけがねえ。それはおれの考えた事じゃねえ。じゃあ、竜神さまが話しかけてくれたんだわ、と思って、ぱんぱん、て拍手を打った。

だから、割あい近くで、それに応えるみたいに、『おおおい！』って人の声が聞こえた時には、死ぬほど魂消た」

040.

「祠の前で、誰かがおれに話しかけた」

保ノ助はその時のことを思い起こした。土砂降りの雨、吹き付ける強風、視界はまったくきかず、耳は細かな音を聞き分けることはできなかった。水中でもまれたあげく泥土にうちあげらえた体はすっかり冷えて消耗し、頭はもうろうとしていた。

それなのに、言葉だけははっきりと聞こえた。あまりにはっきりした言葉だったから、さいしょ、それは自分の中にある考えだ、と思ったのだった。

「誰かがおれに話しかけたんじゃないかねえか、って気がついて、さすがにぞっとしたよ。でも、ちゃんと生きて帰れたし、おやじやおふくろにそんな話聞かせたら、腰ぬかして寝込んでしまうかもしれねえし、ずっと胸んなかにしまっといたんだ……」

「——あの晩、あなたに起きたことを、私のほかに誰かに話しましたか？」

ラウレンス氏に見つめられ、保ノ助は首を横に振った。

「ありがとうございます。保ノ助。よく話してくれました。今の話はとても興味深い」

「先生、それだけじゃあねえんだ」

「——まだ、なにかあったのですか!？」

「え……と、あったっていうか、気がついたんだ。星名のおっさんが言ってただろ、『水つ早湖の小島の祠はえびすさまだ』って。えびすはひるこのことだって。昼間、めるのさまと島にあがった時、祠をのぞかせてもらった。中に、まん丸の、お皿みたいなのが立っていた。手のひらくらいのおおきさでさ。おもてには、こういう……」

保ノ助は頭の上で手の平どうしを少し離して平行にし、ゆっくり右へ、次に左へ、くねらせながらそのあたりまでおろした。両手でゆるい『S』の字を書いた格好だ。

「模様が浮いてた。おれは『なんだこれ』って思った。『なんだか、でかい蛭（ひる）みてえだ』って。それ思い出して、あそこの祠には蛭子（ひるこ）が祀られてるって話にはすげえ、うなずけた」

ふうん、と博士はおかしな具合に眉をしかめた。「蛭って……保ノ助、こーんなちっちゃいくせに肉食で、動物の生き血を吸う、アレ？」

「そお、アレです」

「そりゃまた。私、南フランスの山中で実地調査やってる最中にアレに食いつかれてヒドい目に遭ったことが！ アレだけはどうも苦手ですねえ！ 好きになれません！ ぶるぶるぶる！」

「好きなヤツはいねえと思うけど。おれ、ちょっと竜門渚家のヒトビトを見る目がかわったっつーか」

「そ、そうですねえ……」

「それに、先生」

「今度はなに？」

「すると、おれに話しかけてきたのは『蛭子』さまなのかなあ?? へんだなあ、星名のおっさん、竜門渚家には女しか生まれねえ、って言ってただろ、話しかけてきた『蛭

子』さまは、男だったよ」

041.

星名千介氏との面談は叶ったものの、彼は療養所にてほとんど寝たきりで、病状は思わしくない、とラウレンス氏は 遠野に報告した。

遠野はしわ深い顔を曇らせて、「そうだったか」とつぶやいた。「なにしろ、酒好きだったからなあ。惜しいことじゃ。ワシより二十も若いくせに。……で、どうじゃった、噂にたがわぬ男だったであろう？」

ええ、とラウレンスはうなずいた。「いろんな意味で」と。

「なにか収穫はあったかいな？」

「収穫とっていいのかどうか、興味深いヒントをいくつかいただきましたよ」

「ほお？」

「ところで、遠野さん。お願いがあります」、と彼はおもむろに切り出した。

*

「小島？ あそこを掘り返すつもりかい？」

「いえいえそんなことは。なんでも、とても古い祠があるとか。それを描きたいのです。なに、さほど時間はかかりません」

「ふうん？ ま、好きにこなされ。ただし、私有地であるからには当家の者が立ち会わせてもらおうぞよ」、というわけで、当主は孫娘を指名した。

*

翌日、さっそく舟をだしてもらふことにした。今回の船頭は『かわいや』の亭主。

保ノ助は行きたがったが、「そうそう学校休んじゃならねえ」とおやじが反対したのだった。

「今日は日曜日だぜ」と不服顔のせがれを物陰に引っ張っていき、おやじはささやく。

「めるのおじょうさまも行かれるんだろ？ そりやおめえやめとけ、どんなウワサがたつかわかったもんじゃねえ」

「はあ？ なんのウワサ？」

「ガキにゃわかるめえ、世間てなあ、そういうもんだ」

「つまんねえの」

ラウレンス氏のお供ができないのもつまらなかったが、おやじも世間もつまらない、舟も使えない。風呂場掃除がいちばん、つまらなかった。

042.

「とても古いとは聞いていましたが、これはまた——」

祠の前でラウレンス氏は息を呑んだ。石でできた祠。高さは彼の膝のあたりまでしかない、小さな小さな祠。輪郭はすべて丸くなっている。どれほど長い年月風雨にさらされたものか。

四角い箱の上に屋根を載せただけのシンプルな造りで、スケッチはすぐに終わった。絵にもならないようなシンプルさだった。描き終えても立ち去りがたく、まじまじと見入ってしまう。なぜこれほど気になるのか自分でもわからない。祠には強い磁力があるようだった。

「いったい……なにが祀られているのですか？」、と問わずにいられない。

「……ご覧になりますか」、とめるの。

「え。いいのですか！？ 大事なもののなのでは！？」

「大事ですけど、秘密ではありません」

めるのは言って、祠の正面の石の板を外した。板にはハート型を逆さまにした小さな穴が開いていて、そこに指をかけると簡単に外れるようになっていた。彼女は場所を空けて、ラウレンス氏に中を見るよう促した。そこには——

保ノ助が言った通りだった。直径十五センチほどの平たい、丸い石。

それが丸い面をこちらに向けて——浮いている——立てかけてあるのではなく、なんの支えもなく、床の上数センチのあたりに、浮かんでいる。

「祖母が申しますには、祠の中を見たいという方にはご希望に沿うようにしてまいったのですけれど、実際、どなたも、黙ってしまわれるそうです」

やはり言葉を失いながら、それはそうだろう、とラウレンスは思った。祠のなかの『ご神体』は万有引力の法則を無視しているのだから。

043.

「——あなたは、めるのさん、この祠のいわれを知っておられますか」

「いえ——」

ラウレンス博士はちらりと彼女を振り返った。「その——当主の後継者でおられる、のに？」

「私どもの家系には、文書（もんじょ）というものがありません。先代から教えられな
いかぎり、知るすべがないのです」

「それはまた——」

「奇異なことに思われる、とおっしゃるのでしょうか？」

「ええ……まあ……」

「私も、そう思います」

祠は小島のほぼ中央にあつて、古木の根元に抱かれるように鎮座し、空も湖面も清々しく青く、木漏れ日が祠の上で踊っている。

「私が知らされていないだけなのでしょうが、この小島にも、祠にも、名前がありません。ただ『小島』であり、『祠』なのです」と、めるのの澄んだ声がつぶやく。

「ふむ……」

「この丸いお皿のようなものがご神体と思われるのですが……でも竜門淵にとってご神体とは、この水つ早湖そのものなんです……ではこの祠とお皿はいったいなんなのでしょう……」めるのは自問していた。

滑らかな円い石の表面に太くゆるい『S』の字が浮き彫りになっている。保ノ助からは、「でかい蛭（ひる）のようだ」と聞かされていたが、まったくその通りだ、と博士はこっそり思った。

「変わった家系だと、さきほどおっしゃいましたが、差し支えなければ、聞かせていただけませんか？」

「——竜門淵の家のことを？」

そうだ、と博士はうなずいた。「好奇心から知りたいのかと聞かれれば、そうかもしれません。しかし、その、なんと説明していいかわからないのですが、あなたのおばあ

さまといい、この祠といい、ひじょうに、心惹かれるのです。あの水つ早みやげの小石以上に」

博士はペンを指先にはさんだままの手を、自分の左胸に押し当て、真剣な口調でそう言い、「もつとも」と笑いを含んだ声で続けた。

「好奇心なくして画家も学者もつとまらないのですがね」

「……竜門淵家とは、水神の末裔です」

「神の末裔、とおっしゃる？」

「そうです、始祖は女の竜です。時代がくだるに従い、人間の血が混じりましたが、この家系には女しか生まれません。産み、育て、野に広げるためにそのように仕組まれているのだとか。……私たちはこの湖が竜そのものであると考えています。拝む時は湖を拝むのです。ですから神殿というものがありません」

めるのは祠を見ながら言った。

044.

私はまだ十五歳だけど、とめるのは思う。曾祖母の遠野は七十代後半という、いい歳である。遠野になにかあれば家を継がなければならないとはわかっている。それは家屋敷やしきたりや名字のことではない、ということも。

竜門渕家にははるかな太古から連綿と継承されてきたものがある、らしい。それが何なのか、めるのは知らないのだ。先代から引き継ぎが成されるまでは明かされることがない。

丈夫なのと毒舌が取り柄でここまで長生きした祖母は、最近、目に見えて足腰が衰えてきた。祖母の名代としてめるのが儀式を執り行うことも増えてきた。

(おばあさまの跡を、『竜門渕』を継ぐ日が、すぐそこまで迫っているのかもしれない——)

がたんごとん、がたんごとん、と、汽車は揺れる。早苗の植わった水田は青空を映し初夏の日差しを反射して、きらきらとまぶしい。けれども眺めるめるのはきまって、涙をこらえなければならないほど、ひどく感傷的な気分になる。

友人がいっしょの時は、「また始まった」とからかわれる。「めるのは感受性豊かだものねえ」と。

高台にある駅を出て砂利道をくだっていくと、クスノキの大きな木陰。木陰に吹く涼しい風は湖上を渡る空気の流れの一部だ。水の匂いがする。またもや、めるのは涙腺が緩むのを覚える。

めるのは、じつは隣の松本町の山里で生まれ育った。十歳の時に母親の実家、竜門渕家の当主遠野の養子となり、以来、湖岸で暮らしている。それまでは水も水辺も縁のない生活だった。だから水の匂いを懐かしく感じるのが、めるのは不思議でたまらない。そう、いてもたってもいられないほど激しく心をかき乱される。十五歳の自分に、そんなものがあるのか、これまた不思議なのだが、それは甘く切なく、苦くもある、郷愁の情動だったのだ。

基本的に、めるのはそういう少女だったのだが。

(ラウレンス先生がいらっしゃってからだわ……)

湖と小島の祠にただならぬ関心を示すラウレンス氏の存在が、彼女の心を奥底から揺るがしているようだ。

045.

物思いに沈みながら家路をたどっていたとき、人の声にふと顔をあげた。湖畔をめぐる道であるから、片側は湖。声はそっちの方向から聞こえてきた。誰かの「おーい」と呼ばれる声。

水辺に茂るアシの隙間からのぞいてみると、なんと、舟に乗った保ノ助ではないか。彼はめるのを見かけてうれしそうに手を振っていた。

「や、保ノ助さん——！」めるのは思わず声をあげ、アシの茂みが切れるあたりまで道を走った。

(めるのおじょうさんて、けっこう積極的なんだなあ) 舟の横板に腰掛けてきよろきよろあたりを見回しているセーラー服の女学生に、保ノ助はどぎまぎしていた。岸边を歩いているめるのに手を振ったら、彼女はすぐに駆け寄ってきて、「舟に乗せてください！」とせがんだのだ。

今日は波も風もおだやかで、天気が急変するような兆候もない。むしろ、絶好の遊覧日和である。

めるのは、「保ノ助さん、あの辺りへ……」と指さす。加工された黒曜石が大量にみつかったという辺りだ。「ほいさ」保ノ助は請われるまま、舟の向きをかえた。しかし、湖上から眺めたところで何かわかるわけもない。ただ舟の床板の下、湖底までの数メートルの水の存在を感じるだけである。

……石器の第一発見者は、湖底をあちこち探るうちにこのあたりだけ底が硬いのに気づき、シジミ採り用の柄の長いじょれんを投入したところ、半貴石のような宝物を引き上げたのだった……

「次は、あそこへ」と、保ノ助は請われるまま、舟の向きをかえた。

めるのは古祠に手を合わせる。

祠は見るからに古い土台の上に乗っかっている。とても直線的な造りで装飾物もないので、とにかく古いから大事にされているのだろう、とめるのはずっと思っていた。

(初めて見たとき、不思議に思ったものだわ)

径が十五センチほどの石のお皿が、支えもなく立って、浮かんでいるのである。不思議だとは思ったが、そのうち見慣れてくるとこれはそういうものなのだ、と当たり前になってしまった。しかし考えてみれば、やはり不思議である。そして表面に刻まれた緩いS字——風雨に直接遭っていないからなのか、傷みが少なく、祠そのものよりずっと新しいもののように見える。

「保ノ助さん」いきなり声をかけられて彼は飛び上がった。「へ、へい？」

「あなたはこの石のお皿のこと、何かご存じでしょう！？」

めるの自身、なぜそんなことを言いだしたのか、わからない。直感、としかいいようがなかった。

振り向いたときのめるの視線も口調も、いつになく強かったので、保ノ助は思わずたじろいだ。

「え——え——えーとーえーとー」

046.

ラウレンス氏にはそれとなく口止めされていたのだったが、めるのの目に圧倒されて、保ノ助はしゃべってしまった。この祠は『えびす』さまだ、と。

『えびす』さま？ とめるのは眉をしかめて聞き返した。

「う、うん、星名のおっさんがそう言った。おっさんはなんでそんなこと知ってるのか自分でもわからんて。たぶん、子どもの頃にでも誰かの話をきいて、覚えてたんだろう。ラウレンス先生はそれ、たしかな話じゃないから、よそのひとにしゃべらねえほうがいいかも、って」

めるのは言葉を忘れたように黙ってしまった。

「あー、どうせしゃべっちゃまったんだ」もとより、保ノ助は口が軽い。頭に浮かんだことは口にださずに、いられない。「えびすさまってのはひるこのことなんだとき」

「ひるこ？」

「ほんとは神さまの子どもなんだけど、何かわけがあって——五体満足じゃなかったとか——捨てられた子どものことなんだと、星名のおっさん、言ってたな。神さまもひでえよな、なにも捨てなくたってよお、けっこう、人でなしだよな……」

保ノ助のおしゃべりは続く。祠を目の前にしたところで、彼にとって神の存在は遠い。

神の、捨てられた子。それはめるのの胸にずっと響く言葉だった。

竜門淵の家系に神的存在は一人……一柱、というべきか……しかいない。始祖だ。『これ』は始祖の子ということか。捨てられた子——？

あるいは——この辺りは様々な神々が混然としている土地柄。単に、よその神さまを祀っているにすぎないのかもしれない。

ああ、とめるのは頭を振った。考えたところでわかるわけがない。手っ取り早く、うちへ帰っておばあさまに教えてくれるよう、頼もう。だって、私は竜門淵に関するすべてを継がなければならないのだから。

それにしても――

あなたは、誰？ とめるのは問う。

それは『祠』に対するものでもあり、自分へのものでもあった。

5・「小島の祠」

6・「始祖との邂逅」へ続く

あとがき

えびすさまには様々な謂れがあります。海の向こうからやってくる外来の神であったり、海岸に漂着して富をもたらすクジラだったり。記紀神話において、蛭子命は3歳になっても足が立たなかったために流し捨てられたとされ、その神話を受け、流された蛭子命はどこかの地に漂着したという信仰が生まれ、蛭子命が海からやってくる姿が海の神であるえびすの姿と一致したため、二神は同一視されるようになった。（wikipediaより）などなど。

本作中の話とは全然関係ないのですが、えびすさまについて、ホツマツタエに詳しい記述があります。

出雲のオオナムチは、この時のオオキミ・オシホミミに対して臣として忠誠を果たさねばならないのに、物的に豊かになってしまっておシホミミの宮以上の巨大な宮を造り、奢っていた。オシホミミに代わって政務を執っているタカミムスビは会議を開き、タケミカツチとフツヌシが派遣された。（これ以前に、アメノホヒ、オオセイイミクマノ（別名アメノトリフネ）、アメワカヒコと、三神が派遣されたがいずれも出雲に取り込まれてしまった）

「我々は、貴方の驕りたかぶり曲がった道を正しに来た。その心、まだ変わらんのか？」と二神が問うと、オオナムチは息子である事代主に答えさせようと使いをだした。事代主は美保埼で釣りをしていた。

アメノコタエオ	トフトキニ	コトシロヌシカ	エミスカホ
ワレススカニテ	タラチネニ	ホロロナケトモ	チノタキソ
サカナトキルモ	オロカナリ	タカマハタミノ	エミスタキ
イトカケマクソ	ミコトノリ	ワカチチサラハ	モロトモノ

タカマからの問いに、事代主はえみす顔で答えた。

「私はまっすぐな気持ちで、身を慎んで美保埼に隠棲しておりました。わが父に諫言いたしましたが、鯛のように奢ってしまって、お聞き入れになりません。父はしょせん釣り人の糸にかかった鯛、副の身である臣として威勢を極めるだけ愚かなことです。タカマは民のエミスタキ（笑す尊）、すなわち民は喜んでタカマに仕えているのです。このように甚だおそれおおい勅命には、従うことが道理でしょう。故に、父が退けば諸共に出雲を去りましょう」

ここに登場する事代主とは、オオナムチの長男クシヒコ＝二代目大物主＝大国主＝恵比寿、ということにして、絵に描かれたえびすさまが福々しい笑顔で釣り竿を持ち鯛を抱えているのは、まさにこの段を象徴しているのです。ちなみに、このお方はのちに天孫ニニキネに仕えています。（記紀では入水したことになる）

蛭子をなぜエビスと読むのかわからないのですが、ホツマツタエ・ミカサフミ・神代和字にて、ヒルコ（ワカ姫）、ミコ（オシホミミ）、エビスの三名が揃ってアマテルキミの話（アウタについて）を聞いている場面があります。このあたりに何かわけがあるのかもしれませんが。

さて、ここまではほぼ、さくさくと進んできました。問題はここからです。

2024年10月18日 記

奥付

オリカルクムの記憶

5・小島の祠

2024年10月27日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材 [「イラストAC」](#)

[「素材good」](#)

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
